

# 平成中山道唱歌

## 武州路編

### (日本橋)

華の東京 日本橋  
四方に伸びる 五街道  
道路起点の 元標は  
橋中央に 埋め込まれ

北への道とり 中山道  
勇んで踏み出す 京の旅  
街道描いて お馴染みの  
広重 旅路の友として

(1板橋宿)  
銀座 須田町 人の波  
神田明神 なお盛る  
本郷 白山通り 過ぎ  
トゲヌキ地蔵に 手を合わす

近藤勇の墓を 訪い  
今も賑わう 宿はずれ  
名前の起こり 板橋が  
石神井川に 影落す

### (2 蕨宿)

榎の緑 鮮やかに  
志村に残る 一里塚  
戸田橋渡れば 荒川の  
渡しの跡に カモ遊ぶ

渡しの傍に 水神社  
戸田を過ぎれば 蕨宿  
和楽備神社に 城の跡  
三学院も 北にあり

(3 浦和宿)  
やきごめ坂は きつい坂  
越えたら 次は調神社  
狛犬代わりに ウサギさん  
鳥居がないのも珍しい

浦和の駅前 浦和宿  
地藏信仰 玉蔵院  
常盤公園 将軍の  
鷹狩り後の 御殿山

### (4 大宮宿)

線路の東に 道変わり  
さいたま都心に 近づけば  
高層ビルが 立ち並ぶ  
過ぎれば 別れる氷川道

氷川神社は 一ノ宮  
大宮宿は 門前町  
長いケヤキの 参道は  
はるか昔の 中山道

(5 上尾宿)  
宮原駅前 過ぎて すぐ  
地名にもなる 加茂神社  
南方 愛宕の 各社  
詣でて 上尾の宿に 入る

氷川欽社は 駅近く  
神体 何と 欽二挺  
遍照院 の墓地見れば  
遊女お玉が目立ちおり

### (6 桶川宿)

宿のはずれの 案内板  
鐘馗の像が 上に乗る  
神田に名残す 須田宅が  
一郭占める 北上尾

桶川 紅花商の宿  
いわれ楽しい 名物は  
稻荷神社の 力石  
女郎買い地蔵の 大雲寺

(7 鴻巣宿)  
北本付近は 間の宿  
鴻巣本宿 あった町  
人形並ぶ 人形町  
次に 鴻巣宿となる

左の奥に 勝願寺  
真田氏・伊奈氏の 墓守る  
コウノトリから 鴻神社  
地名のできた 伝えもつ

(8 熊谷宿)

箕田みだは源氏の 発祥地  
吹上付近は 間の宿  
荒川土手を 早歩き  
熊谷宿まで 四里の道

直実なおぎねかかわる 史跡には  
高城神社と熊谷寺たかぎ ゆうこくじ  
本陣 戦火に焼けたるも  
別邸残つて 星溪園

(9 深谷宿)

熊谷市街のはずれには  
地名にもある 国済寺  
見返りの松 後にすりや  
待つは 深谷の常夜燈

深谷自慢の 深谷駅  
名産レンガで 象かたどられ  
踏切左に 清心寺  
もののふ忠度ただのり 供養塚

(10 本庄宿)

漬物名産 岡部町  
六弥太 普済寺開基する  
滝岡橋から 傍示堂  
本庄市内の 道となる  
本庄 古くは 城下町  
城亡き後の 栄えぶり  
中山道では ひけ取らぬ  
本陣二つを 持った宿

上州路編

(11 新町宿)

本陣門 いま資料館  
近くにあるのは 普寛堂  
神保原じんほら過ぎ 神流川かんながわ  
上武じょうぶを繋ぐ 渡し跡

橋を渡れば 右側に  
滝川・北条 古戦場  
新町宿には 何もなく  
残るは お菊の稲荷のみ

(12 倉賀野宿)

サイクルロードに柳瀬橋  
過ぎれば 高崎岩鼻町  
岩鼻代官 支配跡  
一時いっとき 岩鼻県となる

街道左に 烏川  
倉賀野河岸の 跡残す  
河岸で栄えた 倉賀野の  
宿の面影 懐かしく

(13 高崎宿)

発展続いた 高崎へ  
向かう家並み 切れ目なく  
高崎宿は 城下町  
櫓門やぐらが 堀に影写す

城の南の 公園に  
三位頼政さんみよりまさ 祀られる  
街道右の 大信寺  
哀れ忠長 墓残す

(14 板鼻宿)

烏川 越え 豊岡を  
回って出会う 碓氷川  
そこに 藤塚一里塚  
間もなく 板鼻宿に入る

宿が栄えた わけ一つ  
川止め解けを 待つ旅人たびと  
上州一の 旅籠数  
誇った宿も いま静か

(15 安中宿)

鷹ノ巣、久芳橋 渡り  
着いた安中 城下町  
大名小路に 残された  
史跡の多くは 武家のもの

異色は 安中教会と  
マラソン発祥 讃える碑  
最初の図書館 便覧舎びんらんしゃ  
新島襄の 家残る

信濃路編

(16 松井田宿)

おとろえ目立つ 杉並木  
過ぎれば ゆるく上り坂  
松井田宿に 近づけば  
妙義の山容 迫りくる

宿が栄えた 証あかしには

二つの本陣 脇本陣

ときには 不動寺 崇徳寺

本陣の役 になうほど

(17 坂本宿)

五料の史跡 茶屋本陣

信越終点 横川を

過ぎれば 碓氷の関所跡

坂本宿へは 上り坂

地名の起こりは 碓氷坂さかの本

きつちり並んだ 家並みの

後ろに はだかる 剋石はねいしの

山は 碓氷の峠口

(18 軽井沢宿)

険しい山坂 上りきり  
細尾根伝いの道たどり  
急坂下り また上がる  
三大難所の 碓氷峠うすい越え

峠の高さは 千二百

上信二国の 国境くにさかい

熊野三社が 聳そびえ立つ

峠下れば 軽井沢

(19 沓掛宿)

宿の入口 つるや館

宿場と知らぬ 若者が

行き交う 通りの名は銀座

離山を仰いで 信濃路へ

浅間の煙は 絶えぬのに

沓掛宿の名 薄れきて

時次郎の碑は ひっそりと

長倉神社の 裏に立つ

(20 追分宿)

沓掛・追分 両宿は  
いま軽井沢に 仲間入り  
歩を進めれば 刻々と  
姿を変える 浅間山

追分愛した 堀辰雄

宿入口に 文学館

分わか去れ 宿の名の起こり

善光寺への 道しるべ

(21 小田井宿)

初めて南下 御代田町

小田井の 手前の畑中に

取り残された 一里塚

木立は 枝垂れサクラの木

小田井の宿場は 城跡しろの西

家並は 昔のまま残る

旅籠の数は 少なくて

「姫の宿」との 名が残る

(22 岩村田宿)

小田井を出れば すぐ佐久市  
南下続けて 岩村田  
街道口を 五つ持ち  
商い栄えた 城下町

龍雲 西念 両寺に

ゆかりの人の 墓訪たずね

相生町あいおいを 右に折れ

佐久の平野の 広がりへ

(23 塩名田宿)

駒形神社に 立ち寄って

塩名田宿の 町に入る

町並み過ぎれば 千曲川

渡しに 代わる中津橋

舟つなぎ石 確かめて

橋を渡って 丘の上

広がる 五郎兵衛新田に

大日如来だいにちによらいが ぽつとりと

(24 八幡宿)

再び 浅間が美しい  
浅間・蓼科 字をとった  
浅科地区を 通り抜け  
八幡神社で 一休み

(26 芦田宿)

茂田井に酒蔵 間の宿  
若山牧水 思い入れ  
石原坂に 芦田川  
越えて 入るは芦田宿

(28 和田宿)

宿まで続く ゆるい坂  
着いたその日は 資料館  
本陣付近を 見て過ごす  
皆が朝立ち 和田の宿

(30 塩尻宿)

本陣名園 秋の宮  
魁塚さきがけづかから 街道へ  
岡谷を 過ぎれば塩尻の  
きつい勾配 峠越え

名前は 神社に由来して

宿本陣の 土屋家は

宿間 六つの一里塚

塩尻峠は 分水嶺

四百年の 歴史持つ

風格保って 二百年

峠の高さは 一五〇〇

下って 塩尻宿となる。

八幡の宿の 面影を

宿を出て会う 松並木

頂きまでに 要る時間

松本街道の 別れ道

残すは 本陣表門

笠取峠の 入口に

宿からはかつて 二百分

栄えた証あかしの 豪宅いえ残る

(25 望月宿)

南に 蓼科たてしな連峰はつきりと  
碓氷うりゅう以来の 峠道  
瓜生かくなま峠と鹿曲川

峠は 蓼科尾根の端  
風が強くて この名付く  
峠の下りは 七曲ななまがり  
長久保宿が 待っている

(27 長久保宿)

浪人坂の 古戦場  
過ぎれば 御柱みはしら通る道  
諏訪の大社の 春の宮  
下諏訪宿は 門前町

(29 下諏訪宿)

町外まちぞと一面 ブドウ畑  
平出遺跡が 道左みちひだり  
中央本線 現れて  
木曾路の近さ 知らされる

三階建の 御牧館みまき

豎町たてまち・横町 名のとおり

街道唯一 温泉を

信濃しんごの分去れ 洗馬せまの宿

望月いわれの 名を残す

宿の特徴 L字型

抱いて 旅籠の数多く

大火で 消失したなかで

国の重文 大和屋に

本陣古さは 街道みちで一

甲州街道 別れ道

太田の清水が 洗馬の名の

別れて 上がる青木坂

横町左に 和田宿へ

宿場が栄えぬ 道理なし

起こりを伝えて まだ残る

(32 本山宿)

本山宿 もと 松本藩  
次から 木曾路で 尾張藩  
米など流失 監視する  
口留め番所の 跡残る

トチの大木 見た後に  
着いた平沢 間の宿  
本家の奈良井に 成り代わり  
うるしの里の 名乗り継ぐ

木曾の流れが 一休み  
巴御前が遊んだ 淵となる  
義仲館は 物語る  
義仲史跡は あちこちに

国道歩いて 上松へ  
三大難所と 謳われた  
木曾棧の 跡を見る  
残るは 石垣部分のみ

町並み いまもよく残り

奈良井千軒 うたわれた

義仲の里 宮ノ越

宿入口は 十王橋

屋号の表札 各家に

宿の面影 よく残り

出れば 街道半ばの地

玉林院を 訪ねたら

蕎麦切り 元祖と名の高い

水場が幾つか 色添える

京まで 六十七里 との

次は 臨川寺の裏の

信濃路最後の 宿を出る

国の指定の 保存地区

石碑 木曾駒 裾の道

寝覚ノ床への 崖下る

木曾路編

(33 贄川宿)

「是より南木曾路」の碑

続く 鳥居の峠道

国道沿いの 高台に

浦島伝説 懐かしい

過ぎて 片平橋渡り

標高およそ 千二百

福島関所が 建っている

巨岩、怪石 観た後は

奈良井川右 高台を

信濃と木曾の 分水嶺

柵から 北を見下ろせば

国道左の 小野の滝

歩いて 贄川宿に出る

熊よけのベル 鳴らしつつ

福島の宿 一望に

鉄橋下に 流れ落ち

メロディ橋際 番所跡

下れば 飛騨路の分かれ道

遠くは 木曾氏の城下町

須原の宿では 枅形を

どこかそぐわぬ 組み合わせ

藪原宿には 左往く

歴代の墓碑 興禅寺

曲がらず進み 定勝寺

麻衣あさぎ廻神社の 御柱は

江戸期は 天領宿場町

山村代官 屋敷跡

桃山時代の 建物を

横一列に 四本たつ

宿の特産 お六櫛

山村代官 屋敷跡

凌ぐ木造 大だるま

(34 奈良井宿)

(36 宮ノ越宿)

(38 上松宿)

(35 藪原宿)

(37 福島宿)

(39 須原宿)

にえかわ

木曾一 標高 持つ宿に

国道沿いの 高台に

浦島伝説 懐かしい

(40 野尻宿)

懸崖造りの 岩出観音を  
仰いで 国道それる道  
天長院から 折り返し  
大桑通って 野尻宿

宿場の道は 七曲がり

東と西の 入口に

「はずれ」の屋号の家がある

大火で家並みは 失われ

(41 三留野宿)

柿其橋先 国道は

急な崖から せり出して

かつての 棧 偲ばせる

木曾一難所の 伝えあり

蛇抜けの 残した大岩が

随所に残る 三留野宿

宿の東の 等覚寺

円空佛で 名が高い

(42 妻籠宿)

宿の南の 吊り橋に  
福沢桃介 名を残す  
戦沢過ぎれば 妻籠城  
城跡残る 山の上

鯉岩迎える 妻籠宿

古い 寺下中心に

見事に再現 宿場町

奈良井と並んで 保存地区

美濃路編

(43 馬籠宿)

妻籠の次は 大妻籠

馬籠峠を 越える道

雄滝、雌滝の姿より

陣場で見た恵那山 忘れぬ

宿本陣と永昌寺

島崎所縁と 誰も知る

一新された 馬籠宿

藤村の影 ここかしこ

(44 落合宿)

宿出て 新茶屋立場跡  
ここから 十曲峠石畳  
下って 山中薬師前  
さらに下って 川渡る

県道越えれば 常夜燈

落合宿の 南口

本陣 堂々 門残す

宿の西出て 「おがらん」へ

(45 中津川宿)

ちよつと苦しい 与坂から

続く 起伏の多い道

茶屋坂下って ようやくに

中津川宿 東口

四つ目川から 中心部

民家は 多く残れども

本陣建物 既に無し

卯建のある家 横町に

(46 大井宿)

中津川橋 石屋坂  
こでの木坂を 過ぎてから  
甚平坂に 到るまで  
のどかに美濃路の 道たどる

大井の宿場の 特色は

枡形六つの 折り返し

菱屋に残る 資料館

宿の終わりは 大井橋

(47 大湫宿)

西行坂を 始まりに

十三峠の 峠道

二十を超える 坂道に

三つを 数える一里塚

大湫宿の ご自慢は

国の指定の 脇本陣

神明神社の 大杉と

枝垂桜の 観音堂

(48 細久手宿)

二つ岩過ぎ 琵琶峠  
一気に 越えて八瀬沢  
天神辻で 方角むきを変え  
弁天池で 一休み

(50 伏見宿)

鬼首塚に 顔土城址ごうどじょう  
高倉過ぎれば 伏見宿  
宿の南に 洞興寺  
女郎の塚に 香華あり

(52 鶉沼宿)

川沿いの道 歩き切り  
岩屋観音 崖の上  
慣れ親しんだ 清流に  
別れを告げて 峠道

(54 河渡宿)

十一面の 観音を  
本尊ほんぞんに持つ 乙津寺おつしんじ  
河渡がうどの橋から 上流かみ見れば  
小紅おべにの渡しの 舟通う

新しい宿 細久手に

三度の大火で 残るのは

尾張家本陣 大黒屋

日吉愛宕社 宿の外

(49 御嵩宿)

秋葉坂から 藤上と  
諸乃木 謡坂うたがの石畳さいと  
西洞の各坂 上り下り  
和泉式部の廟所前

新村しんむらみなと湊は 宿の西

木曾水運の 船着場

宿ともどもに 栄えたが

都市化の進みに 面影すがたなし

(51 太田宿)

愛知用水 横目見て  
国道歩いて 今渡いまわたし  
渡し場跡を 確かめて  
車よけつつ 太田橋はし渡る

御嵩みたけの宿で 訪ねたい  
先ず本陣に みたけ館  
願興寺内 仏像と  
愚溪寺が持つ 石の庭

三大難所の 渡し跡

今は日本ちラインいの 舟が出る

太田の宿の ご自慢は

脇本陣と 祐泉寺

(53 加納宿)

風情を残す 新加納  
一里塚持つ 間の宿  
次は天いの岩戸わとの 力持ち  
祀る社名も 手力雄たじからお

枅形続く 加納宿  
美濃路で 唯一城下町  
家康築いた 加納城  
いま石垣を 残すのみ

(55 美江寺宿)

糸貫橋先 本田に  
幕府支配の跡残る  
五六川ごろくの名 問い聞けば  
美江寺みえじの宿との 語呂合わせ

宿名起こりの 美江寺みえでらは  
ご利益あらたか 観世音  
本尊 岐阜に持ち去られ  
後は 新たに美江神社

近江路編

(56 赤坂宿)

揖斐川渡つて 小簾紅園 おぞこうえん  
呂久の渡しの 跡にある  
西にまつすぐ 道をと  
杭瀬川 越え 赤坂へ

(58 関ヶ原宿)

国の史跡の 一里塚  
松の並木に 桃配山 ももくぼり  
すべての史跡で 戦いの  
かかわり示す 碑を添える

(60 柏原宿)

ねものがたり 寝物語の 国境 くにざかい  
近江路 最初は柏原宿 かしわはら  
成菩提院 宿の北 じようぼだい いん しゆく  
信長・秀吉 宿とする やど

(62 番場宿)

久礼一里塚 通り過ぎ くれ  
忠太郎生まれた 番場宿 た い し  
聖徳太子が開いた 蓮華寺に  
四百余りの 墓並ぶ

赤坂港に 舟はなく

本陣変わって 公園に

御茶屋屋敷は ボタン園

大塚古墳は そのままに

(57 垂井宿)

南に離れて 御勝山 おかちやま  
家康物見と 安楽寺  
北に 離れて 国分寺  
驚き呆れる その広さ

(59 今須宿)

西に 不破関 自害峰  
史跡は 古く七世紀  
次の集落 山中に やまなか  
常盤御前の 墓が立つ

(61 醒井宿)

北に も一つ 徳源院  
京極佐々木の 墓並ぶ  
宿出て 小高い山の中  
北畠具行の墓 ひっそりと きたばたけ  
醒井宿の 地蔵川  
水源 加茂の神社下  
居醒の清水が 宿の名に いさめ

(63 鳥居本宿)

北条仲時 一行の  
悲劇の時代の 古戦場  
番場の西から 上り坂  
摺針峠の 見晴しへ すりはりとうげ  
広重描いた 絵が見せた えが  
眺望は今や 様変わり ながめ  
内湖は稲田に 姿変え うちこ  
残るは琵琶湖の 青さだけ

相川橋から 垂井宿

美濃街道の 追分で

南宮大社の 門前町

垂井の泉が 名の起こり

低い峠を 越えて着く

今須の宿に 妙応寺

門前町の 家並みは

美濃の 最も西を占め

十王堂わき 十王水 あわこづか

泡子塚持つ 西行水

オハツキイチョウも色添えて

風情で 人呼ぶ 宿場町 ふぜい

坂下り 一気に鳥居本 お

宿に名産 二つあり

赤玉神教丸 大きく店構え あかだま

一方 合羽の店わずか いっぽう



(64 高宮宿)

彦根の道標 後にして  
小町塚 昼寝塚に扇塚  
街道筋に 三塚を  
訪ねて 高宮宿に入る

多賀の大社の 門前町

高宮布は 名が高い

紙子塚やら 円照寺

高宮神社も 人を呼ぶ

(65 愛知川宿)

むちん橋から 葛籠町  
豊郷町と 続く道

伊藤忠兵衛 はじめとし

豪商活躍 物語る

歌詰橋過ぎ 愛知川は

伊勢代参道 岐かれ道

近江商人 行き来して

賑わい栄えた 宿場町

(66 武佐宿)

御宿橋から 五個荘町  
訪ねてみたい 金堂の  
近江商人 屋敷町  
お次は名水 清水鼻

織山後ろに 南下して

老蘇の森の 奥石神社

牟佐神社さき 武佐の宿

象が泊まった 記録ある

(67 守山宿)

武佐・守山の間の宿  
鏡に 義経元服池  
続く篠原 集落は  
平の宗盛 終焉地

朝鮮人街道 追分の

近くに 背くらべ地蔵尊

野洲川橋から 三上山眺め

「京立ち守山泊まり」宿

(68 草津宿)

最澄開いた 東門院  
叡山東が 名の由来  
中宿過ぎて 縹町に  
大宝神社の 広い森

東海道との 追分に

規模の大きな 草津宿

天井川に 水無くも

木屋本陣に 変わりなし

(69 大津宿)

立木神社を 後にして  
新草津川 矢倉橋  
野路の玉川 細々と  
一里山には 一里塚

名高い 瀬田の唐橋と

義仲寺訪ねて 大津宿

街道一の 大宿場

札の辻から 三井寺へ

山城路

(三条大橋)

晚鐘鳴らして 大津絵を  
みやげに 逢坂山を越え  
日ノ岡 亀の水不動  
過ぎれば 道程あと一里

日本橋から ひた歩き

いま 三条の橋の上

弥次さん・喜多さん 目の端に

喜び噛みしめ 橋渡る



鉄道唱歌等の節回しでどうぞ

木村 旭

